

氏名	萩原英子
学位の種類	博士（芸術文化学）
学位記番号	甲博文第14号
学位授与の日付	平成26年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当（課程博士）
学位論文題目	室町時代後期における茶の湯の和様化について
論文審査委員	主査 名誉教授 田中敏雄
	副査 教授 山縣 熙
	副査 教授 藪 亨

内容の要旨

本申請論文は、中国から齎された喫茶に関して、珠光から武野紹鷗の時代を通してみられる和様への志向の高まりを「和漢」から「和」への変容という視点から考察した論文である。

本申請論文は、第一部「漢」と「和」の世界、第二部「和漢」の世界、第三部「和様」の世界の三部から成っている。そして、我が国における喫茶の歴史的経緯を縦軸に、各時代の美術工芸品や文芸作品の理念を横軸とし、縦横さまざまな視点から喫茶の和様化を論じたものである。論を始める前に、第一部冒頭において、本申請論文での「漢」と「和」の用語の意味について論述・解説している。

第一部は、「漢」と「和」の世界についての考察である。第一章では、奈良時代末期から平安時代初期に中国から伝来した喫茶の風習が日本の風土や日本人の生活に即し、次第に和様化していく過程を禅宗寺院における「茶礼」の形式的な面から論じている。第二章では、喫茶の風習だけでなく、美術工芸品、特に陶磁器の分野においても中国の陶磁器を模倣した日本製のものが作られたことを明らかにした。又、絵画の分野においても「唐絵」と「やまと絵」という「漢」と「和」の絵画が足利義政の会所の障壁画に同時に描かれていたという事例を史料を用いて述べている。座敷飾りに関しても、やまと絵屏風に唐絵を掛けて見るという「和漢配合」

が行われていたことを論じる。第三章では、文芸においても平安時代に編纂された『和漢朗詠集』のように漢詩と和歌を交互に配列し、「漢」と「和」を独立させながら、しかも「漢」と「和」の調和を生み出した歌集について論述している。さらにまた、文芸における「漢」と「和」の関連として、「聯句」と「連歌」を取り上げ、論じている。中国で行われていた「聯句」は、漢詩を二人以上の人が一句ないし多句を詠み一編の詩にする。それが我が国でも模倣されて「聯句」が作られた。その漢詩の「聯句」を受けて日本では和歌の上句と下句を数人で詠み連ねる「連歌」が生じる。そこに「漢」から「和」への文化が生まれることにもなる。この「連歌」の理念が茶の湯の理念に深く関係しているということは、後に何度も詳しく論じられている。

第二部は、「和漢」の世界についての考察である。第一章では、初めに「会所から茶湯座敷」としての喫茶の空間が取り上げられている。「和漢折衷・浄禅一致」の世界でもある会所には、さまざまな身分の人が寄り集まり、そこで、「茶礼」「闘茶」「連歌」「聞香」等の芸能や文芸活動が同時に行われた。その時に茶が喫せられたが、それは「御茶湯所」で点てられた茶を隣接する会所へと運び、喫茶の場と点茶の場が乖離していたという指摘を行っている。次に、禅僧で歌人の正徹の『正徹物語』を取り上げ、そこで正徹が伏見院の書と座敷飾りに関して伏見院の書を「和漢に通じたる物」と記述すると共に座敷飾りに関しても同様の感慨を述べていることに注目し、論述・考察している。第二章では、和漢聯句について論述・考察している。和漢聯句は和歌の上句・下句と漢詩の五言の句を詠み合う詩歌である。その後、和漢聯句に連歌の式目が取り入れられ、和漢聯句が連歌化していく過程に着目し、論述・考察している。申請者は、室町時代後期の「和漢」を論じるに際し、文芸や美術工芸だけでなく、和漢兼帯の人々についての考察も行っている。彼らと漢兼帯の人々とは、当時の知識人であり、一条兼良・夢想疎石・能阿弥・三条西実隆などのような貴族や禅僧達で、和漢聯句や連歌を楽しんだ。彼らは、「漢」と「和」の造詣が深い人達であり、その人達を和漢兼帯の人として申請者は評価し、論述・考察している。第三章では、「和」の連歌と「漢」の唐絵との関係について、連歌が「漢」の唐絵の画趣を取り込んで詠じたり、唐絵が会所に掛け並べられていることを、連歌の百韻に見立てたりしていることを取り上げ、論述・考察している。又、唐絵の詩画軸には漢詩の讀を付して鑑賞するのが通例であるが、正徹が唐絵の軸に本来は「あるべからざるよし」の和歌の讀を付している事実を申請者は取り上げ、正徹が「和漢」について「漢」を「和」の感覚で捉えていると論じている。第四章では、茶の湯における「和漢」の問題が取り上げられ、珠光の「和漢之さかいをまきらかす事」という一文と、茶の湯における「和漢」との関係について論述・考察している。この言葉は和物道具と唐物道具それぞれに内在する美的価値の共通性に着目し、道具の取り合わせを行ったものであると申請者は解釈するとともに、和漢聯句と茶の湯の合一性についても論じている。

第三部は、「和様」の世界についての考察である。第一章では、武野紹鷗に見られる茶の湯の

和様化が考察されている。紹鷗の頃まで茶掛けは「漢」の墨跡や唐絵であったが、紹鷗が定家の和歌の軸を掛けたことによって茶掛けを中心とした和様化が進んだと主張する。第二章では、紹鷗が、茶道具に日本で作られた日常雑器を用いたことによって、申請者はより茶の湯における和様化が進んだと指摘する。また同様に、連歌の世界においても、日常の語を用いて詠まれる畳字連歌や俳諧連歌が一般化することによって茶の湯の理念と深い関係にあった連歌の理念に変化が生じ、その結果茶の湯の和様化がさらに押し進められたと指摘した。

審査結果の要旨

本申請論文は、武野紹鷗の茶の湯は和様化された美であるという修士課程の研究成果を礎としている。

中国から齎された喫茶が、室町時代後期に和様化される過程を「漢」から「和漢」へさらに「和」へという歴史的な流れを概観しながら、その要因を美術工芸や文芸の史料を用いて論じている。そして、本申請論文の目的は、茶の湯の和様化が如何になされたかを論じる点にある。奈良時代末期から平安時代初期にかけて中国から日本に齎された喫茶の風習は、時代の変化とともに日本の代表的な伝統芸能になった。その茶の湯は、日本人の精神性を顕著に表す文化として取り上げられている。茶の湯については研究者も多く、よく研究もされ、様々な視点から多数の論文も発表されている。

本申請論文は、第一部は「漢」と「和」の世界、第二部は「和漢」の世界、第三部は「和様」の世界という三部構成になっている。

第一部の「漢」と「和」の世界では、中国で行われていた喫茶についての紹介が試みられている。そして、中国で行われていた喫茶が日本に伝来した当初、日本の喫茶がどのようなものであったかを、『凌雲集』『経国集』等に記された茶に関する記述から明らかにする。鎌倉時代になると中国の宋時代の喫茶法が禅宗とともに栄西等によって齎された。日本で最初の茶書である『喫茶養生記』に記されている養生の仙薬としての茶が、『花園天皇宸記』に記されている「飲茶勝負」の闘茶という芸能性を帯びた茶に変容する点について論じている。さらに、禅宗寺院で行う「茶礼」について記す中国の『禅苑清規』と日本の『大鑑清規』の史料を詳細に比較するとともに先学の論文を引用して、「茶礼」の日本での変容について独自の見解を呈示している。

美術工芸における「漢」と「和」では、中国から齎され喫茶に用いられた陶磁器は一方では日本で模倣されて作られていたという事実を指摘するとともに、他方では、室町将軍家の所蔵品等を記録した『玉台観左右帳記』の記述から唐物重視の価値観があったことも述べている。絵画については義政の東山殿の常御所では唐絵が描かれていたが、御会所の各部屋は唐絵とやまと絵の障壁画が共存しており、「御茶湯の間」には唐絵が描かれていたことを『御飾記』の記述

によって論じ、東山殿全体は「漢」と「和」の混合であるが、各部屋は「漢」と「和」が乖離していたことを明らかにしている。ただ、会所の座敷飾りではやまと絵屏風に唐絵の軸を掛けるという「漢」と「和」の重なり、「和漢配合」がなされていたことにも言及する。

文芸における「漢」と「和」では、漢詩と和歌を取り上げている。「漢」の漢詩と「和」の和歌は、それぞれ独自の表現をもっている。それを活かして、平安時代には和漢の学才に優れた藤原公任が既にある漢詩と和歌を配列して『和漢朗詠集』を編纂した。そこでは「和漢」の調和が生み出されているが、「漢」と「和」が混融しているのではなく、対等の関係にあることを論じている。さらに「聯句」と「連歌」に関しても言及している。聯句は中国の聯句を模倣したもので、漢詩を二人以上の人が一句ないし数句つくり、それを一編の詩にしたものである。この聯句から影響をうけたのが連歌である。また、連歌は平安時代には「聯歌」と表記されていたことなどによって、「漢」の聯句と「和」の連歌との関係を明らかにしている。

第二部の「和漢」の世界では、第一部では「漢」と「和」が分かれていたのに対し、この「和漢」では「漢」と「和」を兼ねていたことと、「漢」を「和」の感覚で捉えていたことを論じている。ここでは「和漢」について論じるために禅僧の正徹が著した『正徹物語』を取り上げている。この中で正徹が、和様書風と唐様書風に精通した伏見院の書は「和漢の兼ねたるもの」「和漢に通じたる物」と評していることから、「和漢」という言葉とその意味に注目する。また、正徹が伏見院の書を評した「からびてけだかい」について新しい解釈を試みている。

さらに、鎌倉時代から行なわれた和漢聯句を取り上げている。和漢聯句は「漢」の聯句と「和」の連歌を即興で詠み合った詩歌で、日本独自の文芸である。申請者は、この和漢聯句が形式的にも内容的にも茶の湯の和様化に大きな影響を与えたと論じている。

茶の湯における「和漢」では、茶の湯の研究者が様々な視点から論じている珠光の「和漢之さかいをまきらかす事」の一文に注目している。申請者も茶の湯の和様化を考察するためには研究せねばならない一文であった。申請者は、珠光の「和漢之さかいをまきらかす事」を、「和」である和物道具の価値と、「漢」である唐物道具の価値を理解し、これらを茶道具としてともに用いることと指摘している。申請者は、茶の湯における日本で作られた日常雑器の使用が和様化へと向う端緒であるという独自の見解を示している。

第三部の「和様」の世界では、武野紹鷗の時代になると「和漢」の茶の湯から「和様」の茶の湯へと変容していくということを指摘する。その顕れとして、紹鷗以前の茶掛けは唐物の墨跡・唐絵であったが、紹鷗が定家の和歌の色紙を茶掛けとして用いたことによって、その結果茶の湯の和様化がさらに押し進められたと論じる。また、紹鷗が茶の湯において生活の中で用いられている日常的な雑器の要素をもつ道具を茶道具として用いたことが和様化の顕れであると論じている。そして、また同様に、和漢聯句から派生した疊字連歌や俳諧連歌が日常の生活で用いる言葉を歌に詠み込み、日常性、即ち日本人の自然のままの姿を連歌の世界に取り入れた

結果も茶の湯の和様化の一端であると結論づけている。

申請者が、茶の湯の和様化の要因は形式的にも内容的にも日本人の生活から生じる自然な日常性が茶の湯の世界に取り込まれた点にあると論じたのは独創的で評価に値する見解である。

山縣副査は「論を展開するにあたって多くの文献と同じ文献を様々な角度から考察した結果、時には文献の援用の意図が理解しがたい場合もある。」と指摘する。又、藪副査からは「本論文においては不明瞭な記述が散見されるので論文全体にいつもの推敲が必要であろう」との指摘があった。「漢」と「和」、「和漢」、「和様」という用語のもつ多様さと複雑さ、その結果として生じるその用語の理解・把握の困難さ等が論を錯綜させ、読み手を困惑させるという場合も生じたのであろう。又、多くの文献を用いつつ、正確な記述を目指したことから起ったかもしれない。山縣副査は「珠光の言葉、和漢之さかいをまきらかす事という一文の解釈を中心に、茶の湯の和様化を論じた大作である。」「限られた文献にさまざまな側面から光を当て、それが和様化への階段を昇ってゆくという論述方法は秀逸である。」「連歌と和漢聯句の関係を基に、連歌と茶の湯の関係を論じ、連歌が俳諧連歌や畳字連歌へ広がる過程で茶の湯の和様化を論じる手法は注目に値する。」と評価する。藪副査は「室町時代の茶の湯における和様への志向に注目しており、意欲的な論文である。」「室町時代後期における和漢混融から和様へと深まる茶の湯の進展について唐絵ややまと絵などの造形美術の分野や漢詩と和歌、聯句と連歌などの文芸の分野の動向に照らして、実証的に手堅く考察し、成果をあげている。」「茶の湯を行った茶人や連歌や和漢聯句に参加した連歌師に注目し、自然と人間との関わりから生まれる、彼らの日常性について論じている点に独創性のひとつがあるといえよう。」とし、全体として意欲的な論文で成果をあげていると評価する。

茶の湯の和様化を論ずるにあたり、「漢」と「和」、「和漢」、「和様」と歴史的に考察しながらその都度、美術工芸や文芸の多くの史料を用いて具体的に論じる点には説得力がある。多くの史料を用いたことによる功罪はあるが、その罪も全体からみると論を左右するような瑕疵ではない。茶の湯の史料だけでなく美術工芸や文芸の史料を上手に絡ませながら独創的な結論に導いてきたのは、真摯な研究姿勢とたゆまぬ努力があったからこそである。この点は審査員全員認めるところである。よって、本論文を博士（芸術文化学）の学位申請論文に十分値するものと認定する。